「自己調整スキル」を育む学級経営の工夫
～Well beingの獲得を目指して～

南九州市立別府小学校
教諭　田中　貴大

目　次

1　研究主題設定の理由・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
(1)　時代の変化に伴う教育的課題から・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
(2)　本県の学習状況の課題から（「令和６年度『学びの羅針盤』」参考）・・・・・・・・・2
(3)　児童の実態から(「令和６年度全国学力・学習状況調査」より)・・・・・・・・・・・2

2　研究主題について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
(1)　研究の方向性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
(2)　目指す児童の姿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
(3)　研究主題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

3　研究の仮説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

4　研究の実際・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
(1)「自己調整スキル」とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
(2)　Ⅰ教科指導(社会科)における「自己調整スキル」を育む実践・・・・・・・・・・・4
ア「自由進度学習」における取組(単元名：「世界に歩み出した日本」)
イ　セルフラーニングカードの活用(単元名：「世界に歩みだした日本」)
(3)　Ⅰ教科指導(国語科)における「自己調整スキル」を育む実践～協働的な学びの中で育む自己調整スキル(単元名：デジタル機器と私たち)～・・・・・・・・・・・・・・6
(4)　Ⅰ教科指導(体育科)における「自己調整スキル」を育む実践～ＩＣＴの積極的な活用(単元名：マット運動)～・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
(5)　Ⅱ家庭学習における「自己調整スキル」を育む実践
～「メディアコントロール週間」の取組～・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
(6)　Ⅱ生活場面における「自己調整スキル」を育む実践・・・・・・・・・・・・・・・9
ア　係活動における取組
イ　個人目標における取組
ウ　ボランティア活動における取組

5　研究の成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
(1)　成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
(2)　課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

【引用・参考文献】
○文部科学省　『小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説　国語編』　東洋館出版
○文部科学省　『小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説　社会編』　東洋館出版
○文部科学省　『小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説　体育編』　東洋館出版
○横田富信　『子どもの自己調整スキルを磨く』　東洋館出版
○木村明憲　『自己調整学習』　東洋館出版
○木村明憲　『自己調整方略』　東洋館出版
○難波駿　『学び方を学ぶ授業』　東洋館出版
○櫻井茂男　『ウェルビーングをデザインする小中学生の非認知能力』　図書文化

１　研究主題設定の理由

(1)　時代の変化に伴う教育的課題から

今日の社会は，社会の在り方が劇的に変わる「society5.0 時代」，変動的で不確実，複雑で曖昧な「VUCA 時代」とも言われている。また，感染症の感染拡大など先行き不透明で予測困難な時代が到来するとも考えられている。このような社会の中で，学校を取り巻く環境も大きく変化し，教育振興基本計画の中では，今後の教育政策に関する総括的な基本方針として**「2040 年を見据えた持続可能な社会の創り手の育成」，「日本社会に根差した Well being の向上」**の２つのコンセプトが掲げられ，我々教育関係者には，その実現に向けた取組が求められている。

(2)　本県の学習状況の課題から（「令和６年度『学びの羅針盤』参考」）

令和５年度「全国学力・学習状況調査」の結果から，本県の各教科の平均正答数や平均正答率は全国平均と同等か，差が縮まっている傾向にあることが分かる。**一方で，「自分で計画を立てて勉強しているか」という自己調整力に関する項目や「普段の生活の中で幸せな気持ちになることはどれぐらいあるか」という Well being に関する項目に関しては数値が低い**傾向にあることも分かる。（図１）

質問項目		小学校		
		県平均	全国平均	差
自分で計画を立てて勉強しているか。【自己調整力】	Ｒ４	２４．１	２７．５	－３．４
	Ｒ５	２５．７	２８．７	－３．０
学習した内容について，分かった点やよく分からなかった点を見直し，次の学習につなげているか。【メタ認知】	Ｒ４	３３．３	３３．２	０．１
	Ｒ５	３１．４	３１．０	０．４
自分にはよいところがたくさんあると思いますか。【自己肯定感】	Ｒ４	３２．４	３９．４	－７．０
	Ｒ５	３５．５	４２．６	－７．１
普段の生活の中で，幸せな気持ちになることはどれぐらいあるか。【Well being】	Ｒ５	４９．２	４９．９	－０．７

※数値は「当てはまる」と回答した割合(%)　**【図１ 令和５年度全国学力・学習状況調査の結果】**

(3)　児童の実態から(実施日：令和６年４月　南九州市立別府小学校　６年い組 15 人)

質問項目	「当てはまる」と回答した児童の割合			本学級で「当てはまる」と回答した以外の児童の割合
	全国平均	県平均	本学級	
①授業で分からないことや詳しく知りたいことがあったときに，自分で学び方を考え工夫することはできているか。【主体性・自己調整力】	３０．３	２９．８	５３．３	４６．７
②自分で計画を立てて勉強しているか。【自己調整力】			２６．７	７３．３
③学習した内容について，分かった点やよく分からなかった点を見直し，次の学習につなげられているか。【メタ認知・自己調整力】	３１．９	３３．４	６０．０	４０．０
④生活の中で，目標や計画を立てて，それに向けて工夫して取り組めているか。【自己調整力】			４０．０	６０．０
⑤自分にはよいところがあるか。【自己肯定感】	４３．４	３６．８	５３．３	４６．７
⑥普段の生活の中で幸せな気持ちになることはどれぐらいあるか。【Well being】	５０．８	４９．６	６６．７	３３．３
⑦学校に行くのは楽しいと思う。【魅力ある居場所・楽しい毎日】	４７．２	５１．６	６０．０	４０．０

※数値は割合(%)　**【図２　令和６年度全国学力・学習状況調査の結果】**

図２は，令和６年度全国学力・学習状況調査の本学級の結果である（質問項目②と④は追加で，本学級の児童のみにアンケートをとった）。本研究では，質問項目①②③④は「自己調整力」，⑤⑥⑦は「Well being」に関わると捉えて研究を進めた。

本学級の児童が「当てはまる」と回答している割合は，ほぼ全ての項目で，県や全国平均を上回っているため，十分な状況であるとも考えられる。一方で，「当てはまる」と回答しなかった児童にも目を向けてみると，**「自己調整力」に関わる質問項目では，学級の４割以上が達成できていない。特に，自分で計画を立てて，それに向けて工夫をして取り組むという質問項目②④に関しては，学級の６，７割が達成できていない状況である。**また，**「Well being」に関わる質問項目では，全国や県の平均を上回っているものの，学級の３，４割の児童が「当てはまる」と回答していない。**

木村明憲氏は，著書の中で「目標を設定し，自らを省みて，調整しながら物事に取り組んでいくことができる人は，仕事だけでなく，きっと日常生活をも調整し，豊かで幸せな人生（Well being）を実現することができるのではないかと思います。」と述べており，「自己調整力」を答えのない問題に立ち向かうことのできる力，自らの人生をより楽しく，幸せにする力だと考えている。

以上のことから，本研究では，「自己調整力」と「Well being」には密接な関係があると捉え，「自己調整力」の育成に焦点を当てて研究を進めることとした。担任として学級全体でより多くの児童の「自己調整力」の育成を図り，児童が様々な場面でより主体的となり，学校生活や日常生活の中で今以上に「楽しさ」や「幸せ」を感じられることを目指した。

２　研究主題について

(1)　研究の方向性

木村明憲氏は，著書の中で自己を調整する力を「自己調整スキル」と捉えており，それを育む自己調整学習の中の学習過程を，以下のように示している。（本研究でも以下，「自己調整スキル」とする。）

見通す	**目標を設定する**	解決したい，達成したいことが何かを考える。
	計画を立案する	決められた時間で，どのように進めればよいかを考える。
実行する	**確認する**	目標達成や課題解決に向けて，方法や方略が適切に進んでいるのか考える。
	調整する	目標達成や課題解決に向けて困難な場合は，課題や目標を再検討したり，方法や方略を修正したりする。
振り返る	**評価する**	目標や課題と結果を比較し，上手くいったことといかなかったことを考える。
	帰属する	評価結果の理由と原因を，自らの変化を絡めて考える。
	適用する	評価結果について考えたことが，今後どのように生かせるかを考える。

【図３　自己調整スキルを育むための学習過程】

本研究でも，学級経営(学習場面や生活場面)の中に，これらのプロセスを意図的に設定し，自己調整スキルを育める環境を整えた。また，設定する場合には必ず全てのプロセスを取り入れるのではなく，内容や状況に応じて取り入れて研究を進めることとした。

(2)　目指す児童の姿

前述した課題から，本研究では，児童の目指す姿を以下のように設定した。

○　目標達成や課題解決に向けて，見通しをもって自ら計画を立てる姿。
○　目標達成や課題解決に向けて，困難な状況になったときに，自ら工夫したり修正したりする姿。
○　目標達成や課題解決における成果や課題を振り返り，次に生かそうとする姿。

(3)　研究主題

本研究では，研究主題を以下のように設定した。

「自己調整スキル」を育む学級経営の工夫
～Well being の獲得を目指して～

3　研究の仮説

Ⅰ　教科指導の中に児童が「目標設定・計画立案」,「確認・調節」,「評価・帰属・適用」できる場を設定することで，「自己調整スキル」を育むことができるのではないか。

Ⅱ　生活場面の中に児童が「目標設定・計画立案」,「確認・調節」,「評価・帰属・適用」できる場を設定することで，「自己調整スキル」を育むことができるのではないか。

↓（Ⅰ・Ⅱより）

Ⅲ　自己調整スキルを育むことで，児童の自己肯定感が上がったり，学校生活と日常生活に「楽しさ」,「幸せ」(Well being)を感じたりするのではないか。

4　研究の実際

(1)　自己調整スキルとは

本研究における自己調整スキルは前述した「目指す児童の姿」のように，目標や計画を立てて，それを基に実行し，成果や課題を振り返り，工夫や修正を加えながら次に生かすことができる。そしてそれらのサイクルを繰り返し行える力であると捉えて研究を進めた。

(2)　Ⅰ教科指導(社会科)における「自己調整スキル」を育む実践

ア「自由進度学習」における取組(単元名：「世界に歩み出した日本」)

自己調整スキルを育むためには，図３に示した学習過程を児童が繰り返し経験することが大切である。本研究では，図３のような学習過程を設定しやすくするために，自由進度学習を積極的に取り入れた。

単元名	世界に歩みだした日本（全６時）					
時数	1	2	3	4	5	6
学習形態	一斉	自由進度	一斉	自由進度	一斉	自由進度
学習	・単元の見通しをもつ。 ・単元の目標と学習計画を立てる。	・教科書の内容４時間分を自由進度で学習する。 ・毎時間の始めは本時の目標を立てさせ，終わりには必ず本時の振り返りを行わせた。 ※児童のつまずきを防ぐため第３・５時のラスト 15 分を全体で共有する時間とした。				・新聞を作成する。 ・単元の振り返りをする。
学習過程	○見通す	○見通す	○実行する	○振り返る		○振り返る

教師から単元で学習することを伝え，児童は教科書４時間分の学習の計画を立てる。

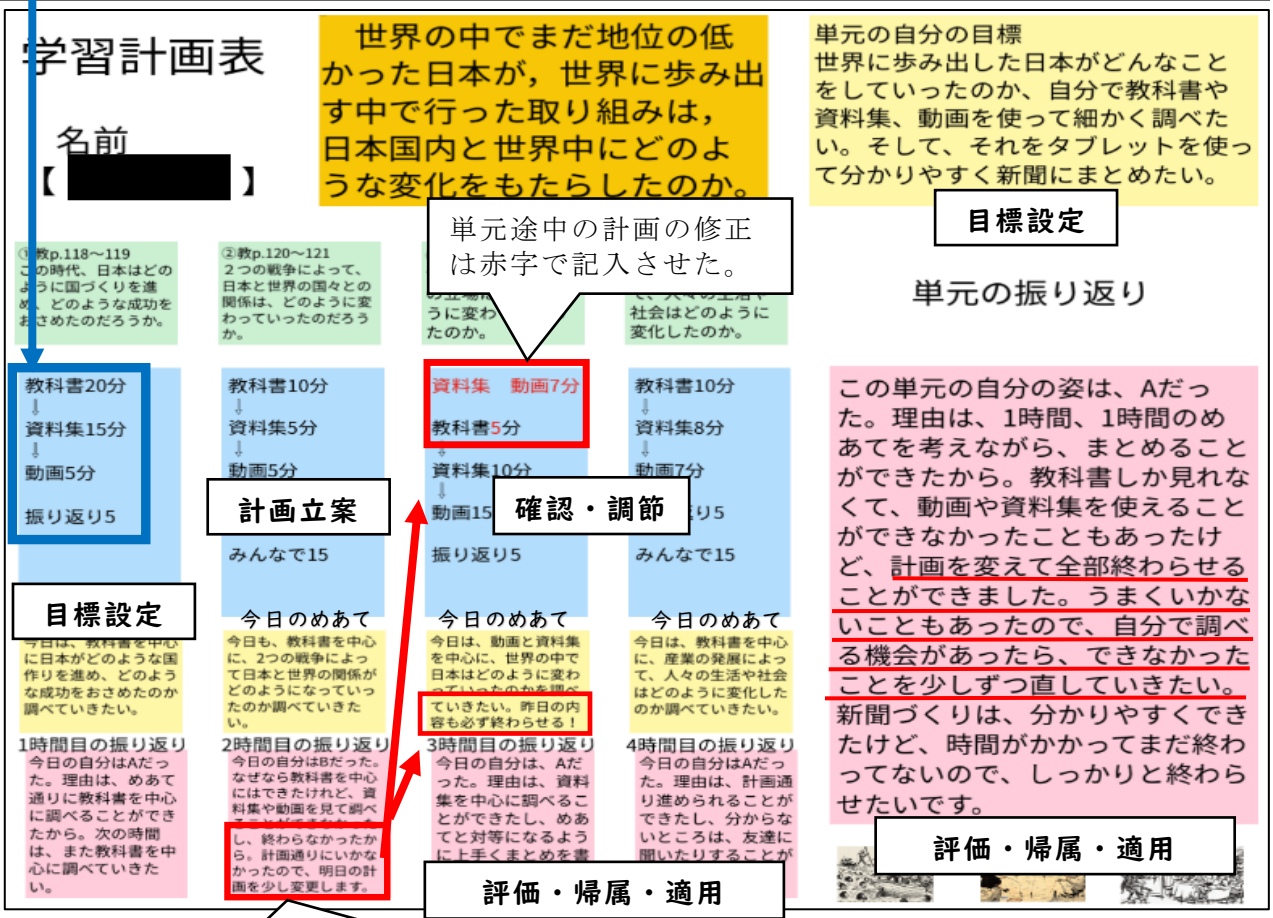
毎時間の自分の学びを振り返らせて，「上手くいったこと，いかなかったこと」を考えさせた。それを基に学習計画の見直し，修正と，次の時間には新たな本時の目標を立てさせた。

児童には，第２～５時までを自由進度学習として自分のペースで進めさせた(第３・５のラスト 15 分は全体での共有時間)。教科書の４時間分（見開き４ページ分）を決められた時間で終わせるために，それぞれが見通しをもって計画を立てた。また，単元途中での学習計画の変更を大いに認めた。

イ　セルフラーニングカードの活用（単元名：「世界に歩みだした日本」）

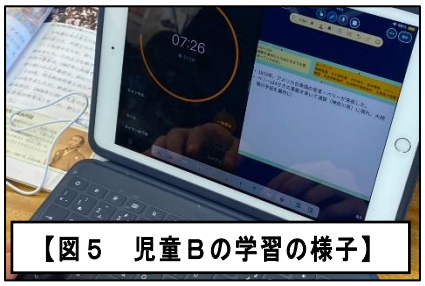
自己調整を図りやすい環境設定の取組として，ロイロノートを活用して，児童にセルフラーニングカードを作成させた。セルフラーニングカードの中には，共通の学習課題や児童それぞれの学習計画，本時のめあてや振り返りの欄があり，単元を通して活用させた。図３にある学習過程のサイクルは毎時間意識させるようにした。

第１時で学習計画を立てさせ，**その際に必ず何を使って，どのぐらい取り組むのか方法と時間を記入させた。方法と時間を意識して取り組ませることは，自己調整を図る上でとても大切であると考えたからである。**学習方法としては教科書，資料集，動画，必要に応じてインターネットを使わせ，進み具合に応じて，学習時間や学習方法の修正を認め，修正箇所は赤字で記入させた。



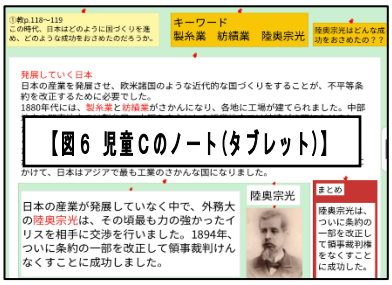
【図４　児童Ａのセルフラーニングカード】

第２時で，計画通りに進められなかった児童が，自分の姿を振り返り，第３時の学習計画を修正し，それを基に本時（第３時）のめあてを立てた。このように，セルフラーニングカードを活用することで，児童が自己調整を図る姿を見取ることができた。



【図５　児童Ｂの学習の様子】

タブレットの２画面機能を活用して，「タイマー」を表示しながら学習を進める児童もいた。



児童には，まとめたノート（タブレット or 手書き）を毎時間必ず提出させた。

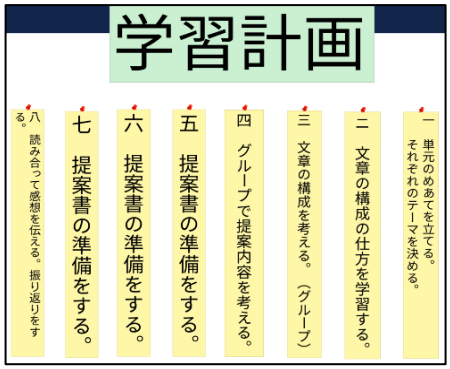
【図７　学習中の様子】

児童全員に専用のイヤホンを配布して，いつでも好きなタイミングで動画視聴できるようにした。

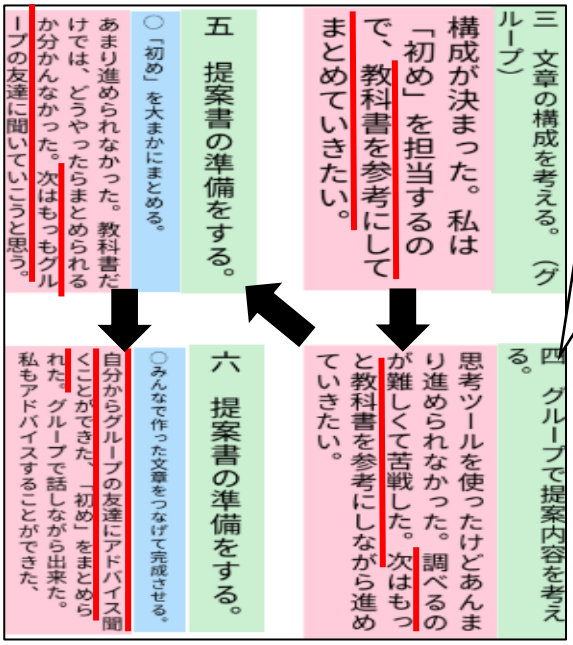
(3) Ｉ教科指導(国語科)における「自己調整スキル」を育む実践～協働的な学びの中で育む自己調整スキル(単元名：デジタル機器と私たち)～

横田富信氏は，著書の中で「子どもが自分の学習を適切に自己調整するためには，個としてのアプローチを前提としながらも，**他者とのかかわりが欠かせない**…。」と，協働的な学びと自己調整学習がつながっていくと述べている。自己調整に関わる成功体験や，方略を友達同士で伝え合うことを通して，さらなる改善の視点を見出せるようになるのである。これらを参考にして，国語科の単元「デジタル機器と私たち」では，３人グループで共有ノートを活用して，情報機器の使い方に関わる提案文を作成させた。

○　全体で共有した取組み方の主なきまり
- 第３～７時を各グループで進める(自由進度)。
- 全員で計画を立てて，計画を基に毎時間進めて，毎時間必ず振り返りをする。
- 提案文は「始め」，「中」，「終わり」の３つの構成で，必ず１人ずつ自分の担当を決める。
- よりよい提案文にするために，友達の担当箇所にも積極的に意見を述べる。



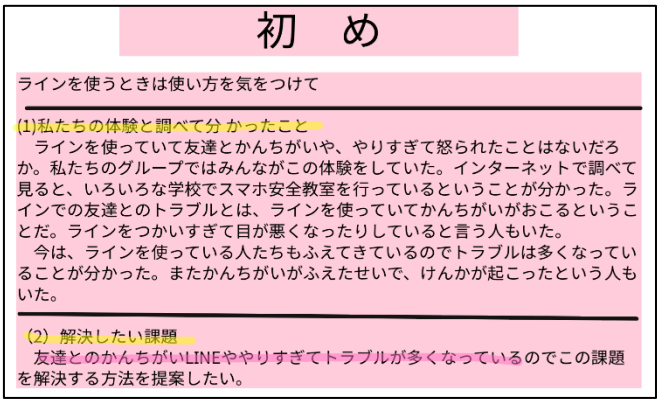
【図８　全体で共有した単元の流れ】



【図９　児童Ｄの振り返りシートの一部】

図９から，児童Ｄが単元を通して自己調整を図っていた様子が分かる。児童Ｄは第３時で「教科書」を参考にして提案書を作成することを決めて，第４・５時でそれを実践したが，あまり上手く進められなかった。そのことから，調整をして，第６時では「友達からのアドバイス」を求めて，自分の担当箇所の「始め」の提案書を作成することができた。

グループ活動という協働的な学びの中でも，「確認・調節」，「評価」，「帰属」という，自己調整学習の学習過程のサイクルを意識して実践している姿を見取ることができた。


初　め

ラインを使うときは使い方を気をつけて

(1)私たちの体験と調べて分かったこと

ラインを使っていて友達とかんちがいや、やりすぎて怒られたことはないだろか。私たちのグループではみんながこの体験をしていた。インターネットで調べて見ると、いろいろな学校でスマホ安全教室を行っているということが分かった。ラインでの友達とのトラブルとは、ラインを使っていてかんちがいがおこるということだ。ラインをつかいすぎて目が悪くなったりしていると言う人もいた。

今は、ラインを使っている人たちもふえてきているのでトラブルは多くなっていることが分かった。またかんちがいがふえたせいで、けんかが起こったという人もいた。

(2) 解決したい課題

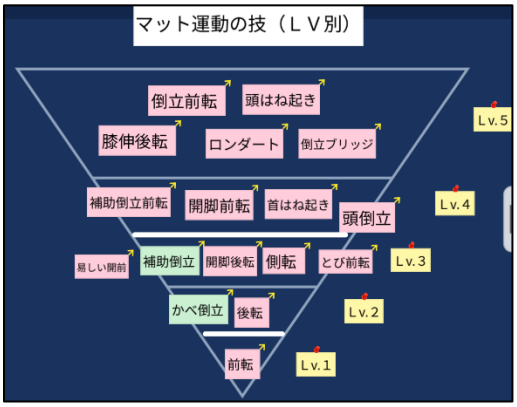
友達とのかんちがいLINEややりすぎてトラブルが多くなっているのでこの課題を解決する方法を提案したい。

【図 10　児童Ｄが作成した提案書の一部】

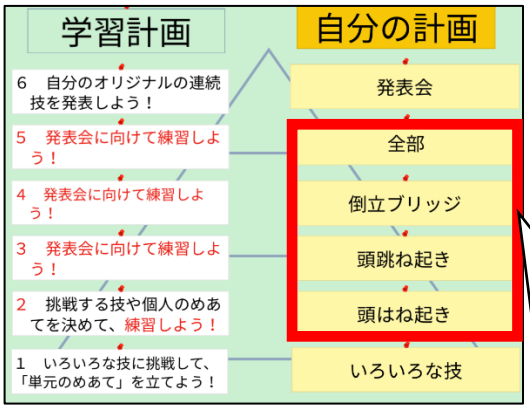
【図 11　協働的な学びの児童の姿】

(4)　Ｉ教科指導(体育科)における「自己調整スキル」を育む実践～ＩＣＴの積極的な活用(単元名：マット運動)～

マット運動の単元では,「これまでに習得した技，できるようになりたい技を組み合わせて連続技をしよう！」という内容で学習を進めた。児童の意欲を駆り立て，単元の見通しをもたせるために，シンキングツール(ピラミッドチャート)を用いた図 12 の表を参考にして，自分が挑戦する連続技を考えてもらった。その後，第２～５時を自由進度学習として，練習計画を立てさせた(図 13)。



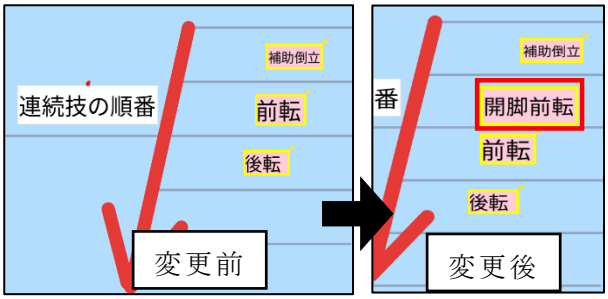
【図 12　技のレベル別一覧表】



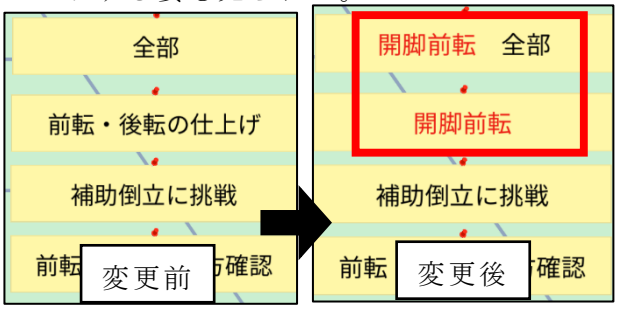
自分の発表する技に合わせて，第２～５時の練習内容を計画し，ロイロノートで提出させた。

【図 13　児童Ｅの練習計画表】

シンキングツール(くま手チャート)を活用して，図 14 のように児童全員に自分が挑戦する技をロイロノートで提出させた。図 14 にある児童Ｆはマット運動が苦手で，単元のはじめでは「補助倒立」,「前転」,「後転」の３つに挑戦する予定だった。しかし，単元の途中で他の児童が「開脚前転」をしている姿を見て,「挑戦する技ではないけれど，私もやってみて良いですか。」と質問してきた。そして，少し挑戦してみて「自分もできそうだぞ。」,「できるようになりたい。」という思いをもって，**単元途中で「発表技」,「練習計画」の変更・修正を行った。単元の途中で，自分の思いと技能，残りの時間を考えて，技と計画の変更・修正をする自己調整を図る姿を見ることができた**。児童Ｆ以外でも，より難易度が高い技に変更・修正したり，その反対で,「自分には難しい」,「残りの時間では発表に間に合わないかもしれない」と技や練習計画の変更・修正したりする姿も見られた。



【図 14　児童Ｆの連続技】



【図 15　児童Ｆの練習計画】

ができないから、家で練習したりして発表までに完璧にこなせるようにしたい。■さんが開脚前転をしているところを見て、私もやってみたくなってやってみたら少しできそうな感じがしました。5年生の時は難しくて絶対にできないと思っていたけど、残りの練習計画を変えて練習してみたいです。発表でも頑張りたいです。

【図 16　児童Ｆの振り返り(第３時)】

なったことや、まだ完璧じゃないけど、開脚前転が上達したことが良かったと思いました。
それに，途中で計画を変更して自分がやってみたい技に挑戦できてとても嬉しかったです。友達にできてないところを指摘してもらって、上手にできるようになりま

【図 17　児童Ｆの振り返り(単元終了後)】

【図 18　友達の姿を撮影している様子】

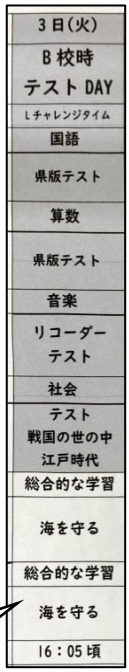
友達同士で撮影を行い，自分の技の確認をさせた。

(5) Ⅱ家庭学習における「自己調整スキル」を育む実践～「メディアコントロール週間」の取組～

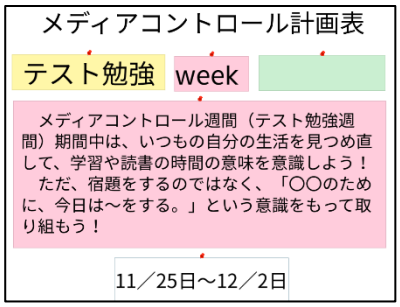
顕娃地区の小学校６校では，顕娃中学校のテスト期間に合わせて「メディアコントロール週間」という期間を年に複数回設けている。この取組期間は，家庭でのメディアの時間を普段よりも意識して宿題や読書などを積極的に行っていくこと，また，小学校から中学校へのスムーズな接続等を目的としている。本学級では，家庭での自己調整スキルを育む機会として，このメディアコントロール週間にも学級全体で取組を行った。

○　全体で共有した取組み方の主な決まり

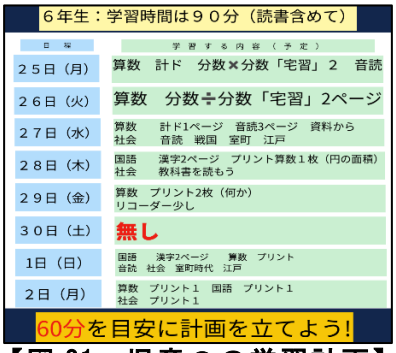
- 　メディアコントロール週間が終わった翌日を「テスト DAY」とする。それに向けて勉強すること(図 19)。
- 　テスト期間は教師側から課題は出さない。
- 　教科や量など自分で決めて計画を立てる。
- 　自分の苦手な教科や領域などを中心に，教科書の問題やドリル，プリントをする。(プリントは事前に教師側が大量に用意して，教室に常備しておいた。)
- **メディアコントロール期間中はタブレット端末を持ち帰り，宿題が終わったら，毎日必ず宿題の取り組み方に関する振り返りをする。そして，振り返りをロイロノートで教師に送る。**



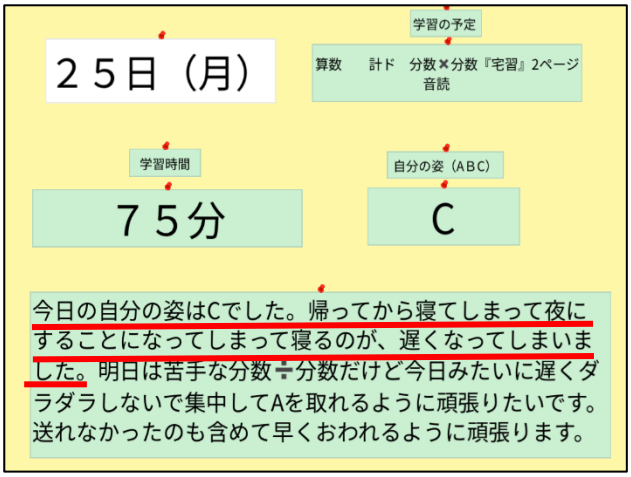
【図 19　テスト DAY の時間割】



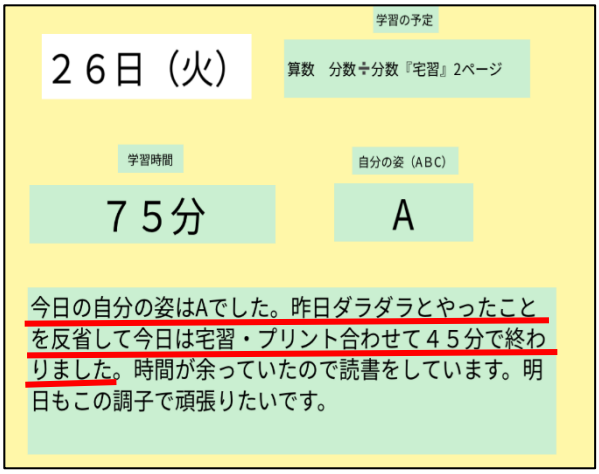
【図 20 児童に配布した資料】



【図 21　児童Ｇの学習計画】

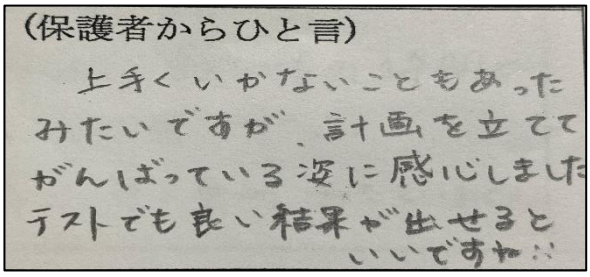


【図 22　児童Ｇの振り返り】



【図 23　児童Ｇの振り返り】

図 22，23 のように，メディアコントロール期間中は，毎日宿題の振り返りをさせた。図 22，23 の児童Ｇは，25 日(月)の宿題の取組方を反省し，26 日(火)の取組に生かすことができており，自己調整を図っている姿と考えられる。メディアコントロール週間の取組は，一学期に１回，二学期に１回と計２回の取組となったが，家庭での自分自身を俯瞰して考える良い機会となった。

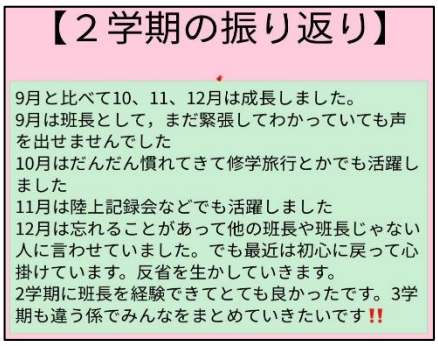


【図 24　保護者からのコメント】

(6) Ⅱ生活場面における「自己調整スキル」を育む実践

ア 係活動における取組

学級においての係活動は，児童の自主性や協調性，責任感を育む上でとても重要な取組である。一方で，やるべきことを忘れてしまったり，自分の仕事を相手に押し付けてしまったりする児童の姿もよく見られる。そこで，本学級では，毎週月曜日の朝の会の時間に係活動の時間を設けた。**この時間に先週の反省と今週の取組の確認をさせたり，係によっては今後の計画を立てさせたりした。**毎週振り返りの時間を設けたことで定期的に自分自身の係の仕事に対する取組状況を確認できて「先週は○○がうまくできなかったから今週は○○を頑張りたい。」，「先週は，友達にお願いしたから今週は友達の分まで頑張りたい。」と，自己調整を図る姿を見ることができた。

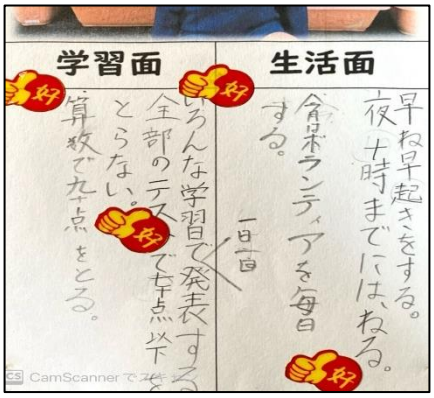


【図 25　児童Ｈの係活動の振り返り】

【図 26 レクリエーション係が昼休みのみんな遊びの内容を考えている様子】

イ 個人目標における取組

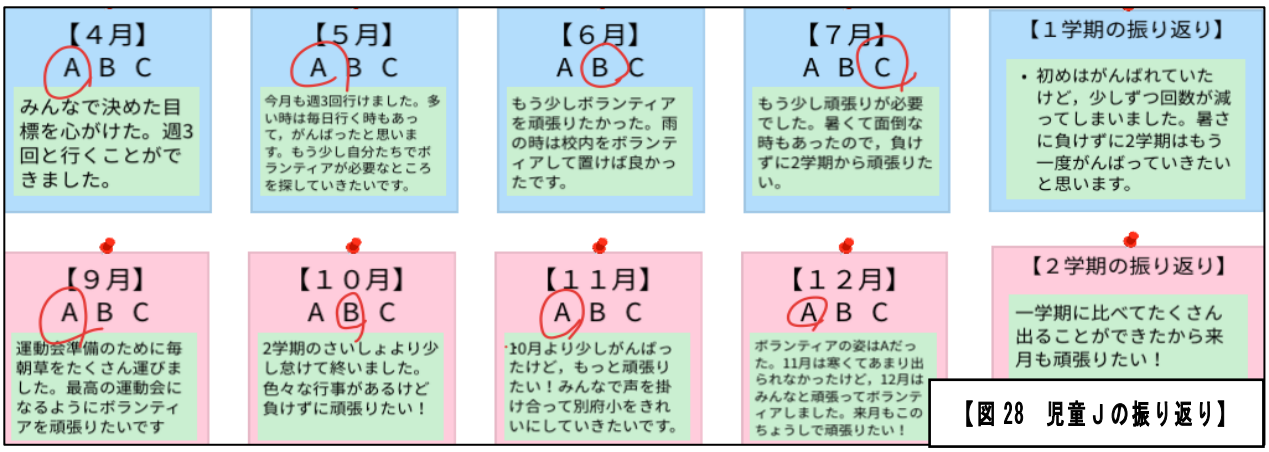
毎学期の個人目標は教室後方に掲示し，朝の会で毎日読ませるようにした。そうすることで，貼りっぱなしにせず常に自分の目標を意識させた。また，**学期途中で目標が達成できた児童は目標を書き足したり，達成が少し難しいと感じた児童には，目標を変更させたりした。**また，目標については数値の記入など，達成できたかどうか自分で判断できるように，できる限り具体的な内容で記入させるようにもした。学級全体の１学期の目標達成率は 100%，２学期は 93%で，試行錯誤している姿を多く見ることができた。



【図 27　児童Ｉの目標カード】

ウ ボランティア活動における取組

本学級児童は５年生の頃から朝のボランティア活動をしており，６年生なった今年度も継続して取り組んでいる。４月に自分達で週３回というルールを設定し，互いに声を掛け合っている姿を見て，児童の自己調整を図る良い機会だと考えた。朝の学校清掃だけでなく，学校生活上においてのボランティア活動を振り返る時間を定期的に設けて，ボランティア精神を育めるようにした。自分達で決めたことと言っても，暑さや疲れからボランティアを休みがちになる児童もいたが，そのような中でも友達からの声掛けや振り返りの時間を通して，改めて頑張りだす児童の姿を何度も見ることができた。



【図 28　児童Ｊの振り返り】

５　研究の成果と課題

質問項目	本学級児童（４月）		本学級児童（１２月）	
	「当てはまる」と回答した児童の割合	「当てはまる」以外の児童の割合	「当てはまる」と回答した児童の割合	「当てはまる」以外の児童の割合
①授業で分からないことや詳しく知りたいことがあったときに，自分で学び方を考え工夫することはできているか。【主体性・自己調整力】	５３．３	４６．７	７３．３ ↑20	２６．７
②自分で計画を立てて勉強しているか。【自己調整力】	２６．７	７３．３	８０．０ ↑53.3	２０．０
③学習した内容について，分かった点やよく分からなかった点を見直し，次の学習につなげられているか。【メタ認知・自己調整力】	６０．０	４０．０	９３．３ ↑33.3	６．７
④生活の中で，目標や計画を立てて，それに向けて工夫して取り組めているか。【自己調整力】	４０．０	６０．０	７３．３ ↑33.3	２６．７
⑤自分にはよいところがあるか。【自己肯定感】	５３．３	４６．７	８６．７ ↑33.4	１３．３
⑥普段の生活の中で幸せな気持ちになることはどれぐらいあるか。【Well being】	６６．７	３３．３	９３．３ ↑26.6	６．７
⑦学校に行くのは楽しいと思う。【魅力ある居場所・楽しい毎日】	６０．０	４０．０	９３．３ ↑33.3	６．７

※数値は割合（%）

【図 29　児童の実態アンケート（４月と 12 月）】

(1) 成果

○　「目標設定・計画立案」,「確認・調節」,「評価・帰属・適用」というサイクルを意識させることで，学習場面や生活場面など様々な場で自ら計画を立てたり，途中で修正をしたりと自己調整を図る姿が見られるようになった。

○　児童の中に「上手くいかなくても修正をすればよい」,「次につなげればよい」という考えが生まれ，学校生活の様々な場面で主体的な姿が多く見られるようになった。

○　授業中や係活動などの場面で，これまでは「先生〇〇が分かりません。」,「次は何をしたらよいですか。」と言ってくる児童が多かったが，現在では，自分で困ったときには工夫したり，どうすればよいかを考えたりする児童が増えてきた。

○　自己調整スキルを育む研究を通して，児童の主体的な姿や学校生活を楽しむ姿，自己を肯定するようになった姿を多く見られた。そのため，改めて「自己調整」と「Well being」は密接な関係にあるのではないかと考える。

(2) 課題

●　今回の研究を通して，改めて自己調整スキルの重要性を感じた。今年度６年生で１年間だけの取組であったが，学校全体で，全ての教科で，低学年のときからなど，多くの場面で時間をかけて取り組ませる必要がある内容だと考える。